HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	7. キャリア教育支援室との合同企画 : 学内機関との初の連携企画によるピア・サポート室の今後の可能性と課題
Author(s)	厨川, 知彦
Citation	北海道大学ピア・サポート活動報告書（平成23年度版）p.89-95
Issue Date	2012-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/49497
Type	report
Note	第2部: 可能性と多様性を提示するピア・サポート
File Information	07.kuriyagawa.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

7．キャリア教育支援室との合同企画

―学内機関との初の連携企画によるピア・サポート室の今後の可能性と課題

厨川知彦[1]

１．企画の概要

この企画は、北海道大学 高等教育推進機構 高等教育研究部 キャリア教育支援室（以下、キャリア教育支援室）からご提案いただき、共同で実施した座談会イベントである。キャリア教育支援室は高等教育推進機構内の組織であり、今回はキャリア教育支援室の宋先生、岡田先生、全学教育科目「インターンシップ」を履修した有志の学生 4 名を中心に企画した。有志学生は、インターンシップ参加学生のコミュニティを形成しており、キャリア教育支援室のもとで活動を行っている。

「可能性と多様性の提示」というピア・サポート室のテーマのもと、この企画はさまざまなインターンシップ、就活経験者が集まる座談会という形式をとることで多様性を確保しつつ、1 人 1 人に寄り添ったアドバイスを提供でき、視野（可能性）を広げることが期待できるため、テーマに則った企画である。

１．１　目的

今回の目的は、キャリア教育支援室で活動するインターンシップを経験した学生と、就職活動を経験したピア・サポーターが協力して学生の進路に関する質問に答え、インターンシップ、就職活動といったキャリア形成のきっかけを学生生活の中で意識する機会を提供するというものである。

１．２　対象

今回の企画の対象は主に学部 1，2 年生である。インターンシップを知ってもらい、次年度にその経験を活かしてもらうため、このような対象とした。

１．３　今回の企画の意義

これまで北大ピア・サポート室は本活やピア・カフェなどを企画してきたが、どれも単独での企画であった。今回の企画は初めて学内の組織との合同イベントということで貴重な機会である。また、進路やキャリアに関する特化するイベントもピア・サポート室にとっては初めてのことである。普段の活動でも、進路や就職活動に関する質問を受ける機会はあるが、今回のイベントではインターンシップや就職活動経験者が集合してあらゆる経験を下級生に提供できる場面であり、普段その場で対応できないような悩みにもワンストップで対応できる機会でもある。

---

[1] 北海道大学法学部　学部生

２．日程

11 月 24 日(木)	第 1 回打ち合わせ
12 月 22 日(木)	第 2 回打ち合わせ
1 月 9 日（月）	第 3 回打ち合わせ
1 月 11 日(水)	第 1 回座談会　(12:30～13:30)
1 月 18 日(水)	第 2 回座談会　(11:30～12:30)
1 月 19 日(木)	第 3 回座談会　(11:30～12:30)
2 月 13 日(月)	反省会

３．事前準備

事前の打ち合わせは、11 月に 1 回、12 月に 1 回、1 月に 1 回行った。

11 月の打ち合わせの趣旨は顔合わせ会と互いの組織理解だったため、合同イベントの中身を詰めるということはなかった。ちょうど 11 月はキャリア教育支援室の方でインターンシップ参加者同士のイベントを行う予定であったため、ピア・サポート室との本格的な話し合いは 12 月以降ということになった。

12 月の打ち合わせでは、イベントの形式、実施場所、時期や大まかな時間帯の調整を行った。今回の企画の対象が学部 1，2 年生であるため、場所は普段から多くの 1，2 年生が利用するピア・サポート室。時期については、年度内でピア・サポート室の利用者数が最も期待できる 1 月となった。開催時期が 1 月となると年末年始を挟み準備期間が半月ほどとなるため、イベントは座談会の形式をとることにした。座談会であれば備品としてピア・サポート室内の椅子、机を用意することで開催は可能であり、特別な備品を用意する必要がないからである。時間は 12 時～13 時の昼休みに重複する 1 時間に決定した。もちろん授業がない昼休みであれば 1，2 年生の参加が見込めるという理由もあるが、運営側の都合もあった。普段のピア・サポートの活動は、ピア・サポート室内に 2 名が常駐しているが、座談会を行うに当たりピア・サポーター、キャリア教育支援室双方の学生が多く参加しなければこの座談会は成り立たない。運営側が多く参加できる時間帯が昼休みであったため、このような時間設定となった。その後、実際に時間を調整し、今回の日程で行うこととなった。そしてこの打ち合わせの日のうちに学内への告知ポスターの掲示、全学教育科目「キャリアデザイン」内でのイベントの紹介を行った。

年が明けて 1 月に 3 回目の打ち合わせを行い、ピア・サポート室内の実際のレイアウト、イベントの進め方についての確認をした。

４．当日の様子

今回の参加者は以下の通りであった。

実施日	参加学生数（運営スタッフを除く）
1 月 11 日(水)	2 名
1 月 18 日(水)	2 名
1 月 19 日(木)	13 名

ピア・サポート室内のレイアウトは、開催日がピア・サポート室の開室日か否かで若干異なるものだった。ピア・サポート室開室日（1 日目、2 日目）は、オープンスペースを半分にし、イベントスペースと通常開室スペースに分けることにした。これは日頃オープンスペースを利用している学生への配慮である。また、イベントの時間が 1 時間と短く、イベント終了後すぐにオープンスペース全体を通常開室時に原状回復する必要があったので、半分に分けるレイアウトとした。半分に分けるに当たり、特別なパーテーションは設けず、机の移動だけでスペースを区切った。（図 1）

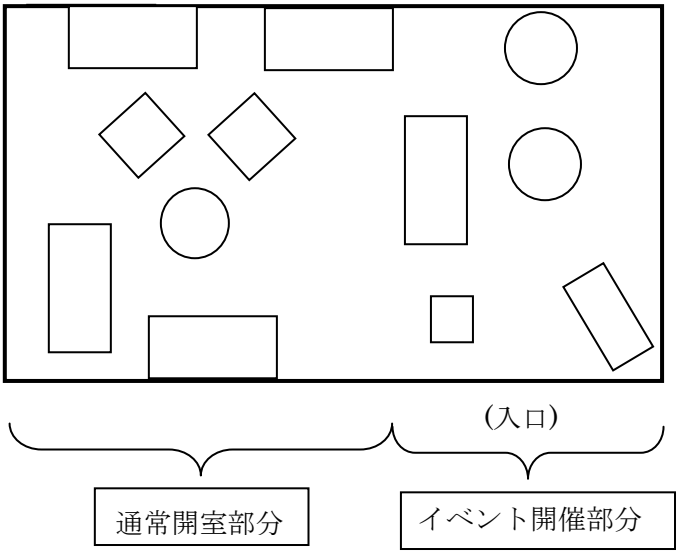

図 1　ピア・サポート開室日のレイアウト

一方、3 日目はピア・サポート室閉室日だったため、机によるエリアの区別は必要なかった。そのため、椅子の円陣を 2 つ用意するのみであった。

運営側のピア・サポーター、キャリア教育支援室の学生の配置は柔軟に行い、イベント開始直後の座談会スペースに参加学生がいない段階では 2，3 人がピア・サポート室の入口で呼び込みを、学生が集まってきたら呼び込みを少なくし、座談会に人員を移動させた。

また、開催した 3 日間、キャリア教育支援室の岡田先生がお菓子やお茶を用意してくださり、当日はお菓子を食べたりお茶を飲みながら質問に答えるという様子であった。

初日、2 日目ともに参加者は 2 名で、参加した学生は 40 分から 1 時間ほどインターンシップや就職活動に関する相談をしていた。1 人の参加学生につき、ピア・サポーターとキャリア教育支援室の学生 2，3 人が付く形で行われた。初めは 1 月という時期もあり、期末試験やレポートの話でアイスブレイクを進め、徐々に自らのインターンシップ経験や就活経験、現在の学部での話などをしていた。例えば経済学部の 1 年生は、新聞やテレビで毎日のように報じられる「就活氷河期」に対する不安や、「いま何をしたらいいか」といった漠然とした疑問をもっていたため、そこに付いた学生は、それぞれ 1 年生の時に何を考え何をしていたかを語っていた。複数の先輩学生の考えや経験を知ることにより、特別決まった形がないことを知れたことで、参加してくれた 1 年生も疑問を解消できたと答えていた。しかし人数としては両日とも参加者が 1 時間で 2 名のみだったため、宣伝方法を変更することにした。初日、2 日目はインターンシップを強くアピールしていたが、3 日目は就職活動や進学・学科分属を打ち出すようにした。今回の合同イベントはインターンシップを経験した学生主体で運営したため、インターンシップを通じた学生生活をメインテーマとしたいところであったが、2011 年 12 月のピア・カフェアンケートでインターンシップを知らない学生は 118 人中 31 人であったように、約 26%の学生がインターンシップという言葉をいまだに知らないという結果が判明していた。とはいえ、それは極端に多くなかったということと、今回の企画の特徴がインターンシップ参加学生の体験談であることから、当初は呼び込みでインターンシップを強調していた。しかし実際は、インターンシップという言葉を知っている学生も、それが実際どう役立つものかをイメージしづらいようで、宣伝方法の変更につながった。

また、ピア・サポート室前に掲示するポスターもデザインを変更した。以前は学内に掲示していたポスターを、拡大して使用していたが、より分かりやすくするため「就活」、「進学・学科分属」、「インターンシップ」のキーワードのみを大きく掲示することにした。以前はイベントをやっていることは分かっても、具体的にどんな情報を得られるかが不明瞭だったが、キーワードのみを掲示することで得られる情報を具体化させ、かつ「就活」や「進学・学科分属」といった「インターンシップ」の認知度にとらわれず多くの学生が必ず将来的に経験するものをアピールすることでより注目を集めるような工夫を行った。

その結果、最終日の参加者は 13 名となった。最終日は広報の内容を変更したこともありイベントが伝わりやすくなったためか今回で最も多くの学生が訪れた回になった。しかし、運営側の学生の数が最終日は 3 名と少なく、対応できる人数が限られたため、実際には途

中で入り口での呼び込みを中止するという結果になった。当日運営側の人数がより多ければ参加人数はさらに伸びたと思われる。

最終日の座談会の内容は、初日、2日目よりも学科分属や就職活動についての直接的な質問が多かったように思える。反面、インターンシップを問う質問は少なかった。例えば、理系学生であれば、「○学部の○○学科に進みたいが、どのような進路があるのか」や、「○○学科の研究室の特徴が知りたい」などで、文系学生であれば「就職活動はいつから始めればよいか」や「○○学部の講義や試験について知りたい」といったものであった。

５．考察

2月にピア・サポート室にて合同イベントの反省会を行った。反省会では座談会中にそれぞれがどのような会話をしたかということから全体の反省についてピア・サポート、キャリア教育支援室で意見交換をした。その反省点を踏まえ、以下考察にまとめる。

イベントの運営に関する考察は以下の通りである。

今回の企画では学生の進路に関する意識の特徴がよく表れていた。まず、最終日に広報の謳い文句をインターンシップのみから学部、学科分属にまで広げると多くの学生が訪れたことからもわかるように、大学卒業後のキャリアよりも直前に迫った学部、学科分属の方に関心が強いということである。その意識も学生の所属によって異なる。まず学部入試によって入学した学生は既に学部が決定しているため、インターンシップや就活等卒業後の進路選択にも意識が向きやすい。学部が決定している学生の中でも特に理系の学生は学科分属への意識が強く、総合文系、総合理系の学生は、卒業後や学科分属でもなく、学部分属への意識が集中していた。そのような学生が多いということは現在北海道大学の中で、学生目線での学部や学科を紹介する機会が求められている結果ともいえる。総合入試の導入に伴い、学部ガイダンスをはじめ、学部学科の特徴を得る機会は確保されているようにも見える。しかし、同じ学生の立場での意見や感想は 1 年生にとってイメージしやすく、そのような声をまとめる組織としてピア・サポートは最適である。

また、終了後の反省会の中では、学生と話をしても、「この学部でこれをしたい」とか、「将来はこれをしたい」という目的意識が低い学生が多いという感想が多かった。しかし、現在大学で学んでいる内容がどういう形で活きるのかを実際に経験したインターンシップの話を聞くことで現在と将来をリンクさせることができ、進路への興味関心を深められたというケースもあった。このように 1 年生の興味関心の幅を広げるきっかけを提供するには、学部案内に掲載されているような最大公約数的な情報ではなく、学生１人１人がそれぞれの考え、将来のビジョンなど複数の要素からなる環境で、なぜその進路選択をしたのかというプロセスを提示することが非常に効果的だとわかる。そして、まさにそれが多様性と可能性の提示という、これから北大ピア・サポートが目指す方向とも合致すると痛感させられた。今回の企画が、今後表面的な情報と情報の間にある、個々の学生のプロセスを提供できるような活動に活かされればと願う。

次にピア・サポート室とキャリア教育支援室という２つの組織が連携したという点か

ら考察する。

今回のイベントは「インターンシップや就職活動という経験から学生生活を考えるきっかけを提供する」という抽象的なテーマのもと行った。それはピア・サポートとキャリア教育支援室の強みを活かした結果であるが、コンセプトを座談会という場にいかに反映させるかで意識のずれが生じた場面があった。これは、キャリア教育支援室としては、インターンシップを会話の導入としつつ学生生活のなんでも相談という企画だったのに対し、ピア・サポートとしてはインターンシップ・就活相談という企画を想定していたためであった。仮にキャリア教育支援室のコンセプトでは、学生による学生相談という普段のピア・サポート活動と特別変わらないものであり、一方のピア・サポートのコンセプトではキャリアセンターが行う企画に近いものがあり、それぞれ差別化する必要があった。結果として 1，2 年生向けのインターンシップ、就活、進学等の相談会という形に納まった。共同での企画は互いの定義や背景が異なっているにもかかわらず、確認を怠りずれが広がっていくことも多々あるが、改めて意識させられる場面であった。共同企画となると、それぞれが自分に無く、相手にあるものを求めがちになり、周りの環境を見失う可能性もある。今回で言えば、キャリアセンターが行う企画との差別化がうまくできないという点がそれにあたる。共同実施の際には互いの特徴を活かす企画を練ることはもちろんのこと、周辺の学内資源の中での立場や役割を意識することが重要である。

日程に関して、今回反省を得られたのは開催曜日についてである。今回は初回と 2 回目がピア・サポート室開室日、最終回が閉室日に開催したが、イベントを行いやすかったのは閉室日であった。当初は、開室日に開催した方が、普段利用している学生の参加を期待できるため良いかと思われたが、実際には逆で、イベントと通常開室が併存すると、普段利用する学生は普段と違うということで萎縮し、イベントに関心がある学生も普段のピア・サポート室と同じような印象を受けてしまうため混乱させてしまうような印象を受けた。一方、普段は活動しない木曜日に行った最終回では、通常開室を意識せずイベントの宣伝のみ行えるため、運営側も利用する側も理解しやすかった印象である。

キャリア教育支援室の学生はこれまでにインターンシップ参加学生同士の交流会を行っていたため、インターンシップのイメージがある人同士の説明は経験していたものの、今回はインターンシップをよく知らない学生に説明するということで、説明するむずかしさを知ると同時に、他学年の生の声を聞く良い機会になったとの声をいただいた。一方でピア・サポートとしても初の合同企画を通じて、単独企画とは異なる準備の詰め方を経験したり、連携することでより多くの学生に有益な情報を効果的に提供することができ、貴重な経験となった。さらに、今回の企画で初日に参加した学生はこの企画を通じてピア・サポート室を知り、イベント後も何度か足を運んでくれており、イベントをきっかけにピア・サポート室の理解がより深まっていることを実感することができた。これは前期ピア・カフェの前後でも表れた効果であり、これからも「つながり」を生みだすことを前提として企画を練ることが重要だといえる。

確かに、今回の合同企画は準備不足な面があり、結果として参加学生数が伸びなかった

のは客観的に見て明らかである。企画者視点では充実した企画により多くの学生に参加してもらうことはもちろん重要であるし、第三者から見ても参加者数が多いイベントは成功、少なければ失敗と判断されるかもしれない。その点については今回の反省として、次回に活かす必要がある。しかし、一方で参加学生視点では 1 時間近く進路について先輩の話をじっくり聞けたり、新たにピア・サポートという場所を知ることでその人の学生生活やキャリア形成に新たな視点を提供できたのも事実である。今回この企画がなければ、その学生は視野を狭めたまま、あるいは今後の進路に不安を抱えたまま学生生活を過ごすことになったかもしれない。その意味で、今回の企画に大きな意義があったということも当然言えるはずであり、ピア・サポートの役目を果たせ、成功した部分も少なからずある。

次回、他組織との連携をする際には今回の成功部分、失敗部分の経験を活かし、お互いの長所を最大限に発揮できるようなイベントができればよいと考える。